

学園SOL

# 里沙の日記

眉村 卓



---

## まゆむら・たく

昭和9年10月20日、大阪生まれ。大阪大学経済学部卒。日本ペンクラブ、推理作家協会、SF作家クラブ会員。『消滅の光輪』『なぞの転校生』『ねらわれた学園』『思いあがりの夏』『地獄の才能』『ねじれた町』ほかコバルトシリーズに『逃げ姫』『孔雀の街』『月光の底』『侵入を阻止せよ』などがある。趣味は写真を撮ること。柔道。

---



## 里沙の日記

---

### COBALT-SERIES

---

昭和63年8月10日 第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著 者 眉 村 卓

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社  
会社

〒101-50

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 東京 (230) 6 3 9 3 (販売)

(230) 6 2 6 8 (編集)

---

印刷所 凸版印刷株式会社

---

© TAKU MAYUMURA 1988

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁の本はご面倒でも小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611189-6 C0193



COBALT-SERIES

学園SF

# 里沙の日記

眉村 卓

集英社文庫

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

## 目次

### 里沙の日記

|   |          |     |
|---|----------|-----|
| 1 | 寒い朝      | 5   |
| 2 | 里沙の日記    | 47  |
| 3 | 名門中学生    | 81  |
| 4 | 暗い進行形    | 115 |
| 5 | 目がさめると   | 151 |
| 6 | ゲームのメンバー | 189 |



# 1 寒い朝

## 1

空が変に青く、風がやたらに音を立てる朝であった。

そのぶん、寒さが身にしみる。

交差点にさしかかったところで信号が変わったので、あきだりようじ浅田良司は足をとめた。

目の前を車の群れが通り過ぎるうちにも、良司と同じほんちよう本町中学校の生徒たちの数が増えてゆく。

ここの信号は長いのだ。

「よう」

いいながら、良司と肩を並べた者があった。

家の近所の、にしあきら西旭だ。

子供のころはよく一緒に遊んだものだが、中二の今はクラスが違うせいもあって、そんなに親しい仲とはいえなくなっている。

「やあ」



良司も、しかし、一応の挨拶を返した。

車の流れがとまる。

青になった。

生徒たちが渡りはじめる。

「寒いな」

歩きながら、旭がいった。

「ああ、寒いな」

良司も応じた。

そんなことぐらいしか、話すことはないのである。

交差点を渡り切った生徒たちは、いつものように男女ひっくるめての黒い制服の流れとなつて、学校へ進んで行く。

しかし。

その途中に、乱れが生じているのだ。

人垣ができている。

「……………」

良司と旭は顔を見合わせたものの、そのまま無言でそっちへ近づいた。  
みんな、ざわざわと何かをとりかこんでいるのだ。

「頼む！」

人垣の中から、声が聞こえてきた。「だれも助けしてくれないのか？ 頼む。こいつに水をやってくれ！」

なんだろう。

ふたりはその輪に入って行った。別段<sup>べつだん</sup>みんなをかき分けなくても、ちょっとようすを眺めた者は、すぐにそこから離れて学校へと急ぐので、自然に前方が空<sup>あ</sup>き、接近が可能になるのである。

良司は前に出て——見た。

かたまっているのは、三人。

みな、良司と同じ年ごろで、ふたりは男、ひとりが女である。

男は学生服、女はセーラー服なのだ。

が……その制服はあちこちが破れ、よごれている。のみならず顔にも手足にも、傷を負っているらしい。ふたりが立ち、ひとりがしゃがんでいるのだが、しゃがんでいる男生徒は片方の足にタオルのようなものを巻きつけ、そこに血がにじんでいるのだった。

男生徒ふたりは白線のついた制帽をかぶり、襟<sup>えり</sup>にはバッジがついているし、女生徒のほうもやはり校章を胸に留<sup>と</sup>めているものの、良司にはどこの学校か、全<sup>まった</sup>くわからなかった。見たこともないデザインなのだ。

それに、ふたりの男生徒は、手に太い杖をつかんでおり、女生徒は女生徒で、おかっぱにした頭に鉢巻きをしているのである。

異様な連中だった。

——と、彼がそう見て取ったとき、立っている男生徒が、杖をふりあげてまた叫んだのだ。「おまえたちには、人情にんじょうというものがないのか？ ここのこの男はけがをして、水が欲しいといっているんだ。だれか、水を与えてやってくれ！」

「お願いよ！」

女生徒も、しゃがみ込んでいる男生徒をかばうようにしながら、声をはりあげた。

「なんだ？ こいつら」

彼の横に来た旭がいう。

「なんだ」

「変なやつらだ」

周囲の生徒たちは鼻を鳴らし……だが次々と去ってゆくのだ。そのあと、またあたらしい生徒たちが寄ってきて、何秒間か眺めてから、離れて行く。もうすぐ始業時刻なので、こんなところで時間を潰つぶしてはいられないのだった。

「行こう」

旭がうながした。

「頼む！ 水だ！」

立っている男生徒がわめく。

「水なんかでなくても、あっちにジュースの自動販売機があるじゃないか！」  
こっちの生徒のひとりが、交差点の方向を指して教えた。

「何？」

その男生徒が反問する。

「金を持っていないんだな」

旭がささやいた。それからにわかに思いついたらしく、ポケットに手をつ突っ込むと、硬貨をとり出したのだ。

金をやるつもりらしい。

いい考えだ、と、良司も思った。

だから彼も、旭が硬貨をぽんとかれらのほうに投げるのにつづいて、自分も硬貨を一枚つかみ出して、ほうったのである。

水をくれと叫んでいた男生徒は、目を見はった。

あとのふたりも、ぎくりとしたようだ。

「何をするんだ！」

はじめの男生徒がわめいた。

構わず、また何人かが、硬貨を三人めがけてほうり出した。

「それでジュースでも買えよ」

硬貨をほうったひとりがいった。

だが。

「馬鹿にするな！」

立っていた男生徒は、顔を真っ赤にして絶叫した。「われわれは乞食じゃないぞ！ 侮辱す

るのか！」

女生徒は、唇を噛みしめ、こちらをにらみつけている。

しゃがんでいた男生徒まで、蒼白な顔で杖にすがって立ちあがりながら、かすれた声を出した。

「結構だ！」

その男生徒は、はじめの男生徒に、ついで女生徒に目をやり、低くいったのだ。「もう結構だ。こんなやつらの……お情けを受けたくはない」

「……………」

「……………」

男生徒と女生徒は、その男生徒を両方から支え、よろよろと交差点のほうへ歩きはじめた。

「なんだ？」

「なんだ、あいつら！」

こっちの生徒たちが、口々にいう。

良司も、あつけにとられていた。

どういふつもりだ。

せつかく、助けてやろうとしたのに。

おかしな連中だ。

そのときにはもう、硬貨を投げた生徒たちが、自分のを拾いにかかっていた。

「浅田、これ、おまえのだろ？」

旭が、一枚を彼に渡し、あとから来た生徒たちの好奇の視線の中を歩み去ってゆく三人に顔を向けて、ふん、といった。「全く……わけのわからんやつらだ！」

「……………」

「行こう。遅刻するぞ」

旭にいわれて、彼はわれに返り、みんなとともに、学校へと急いだのである。

## 2

一時間目が始まって、十五分ほど過ぎた。

国語である。

それも文法で……良司にとっては退屈であつた。とうに塾で習つたところなのだ。

教室の中は、私語でがやがやしていた。先生がときどき静かにしろというのだが、効果はいつときだけで、じきに元に戻ってしまうのである。

良司は、何気なく視線を左手の——窓に向けた。

彼の席は窓ぎわで、この教室自体が一階にあるために、そのつもりになれば運動場がよく見えるのだ。

そこで彼は、おやと思つた。

運動場のむこうのほうに、数名か、十名足らずの生徒がかたまっている。

授業中ではあるが、そういう生徒はすくなくないのであつた。教室を抜け出して遊んでいるのだ。

そこに見えている生徒たちに、彼は見覚えがあつた。三年生の、とりわけたちのよくないグループなのである。

が。

いるのはかれらだけではなかつた。

かれらと向き合う格好で、三人の男女生徒がいる。

ふたりの男生徒は肩を組むようにし、空いたほうの手には太い杖を持っていた。女生徒は鉢

巻きをして――。

あの連中だ！

登校のときに出くわした、水をくれといていた、奇妙な三人なのである。

そのときまで、彼はその三人のことを、すっかり忘れていたのだった。

それが……。

あれから三人は、こっちへ引き返してきたのだろうか。引き返して、学校へ入ってきたのだろうか。

どうも、そのようだ。

しかし、彼が眺めているうちにも、事態は変化、あるいは進行をつづけているのであった。三年生のグループは、何か文句をつけているらしい。

それに対して三人のほうは、相手にしようとせず、少しずつこちらへと近づいてくるのだ。

「浅田！」

突然、先生の声が飛んできたので、彼は教壇へと向き直った。

「どこを見ているんだ！ 外に何かおもしろいことでもあるのか？」

先生はいった。

「……………」

彼は黙っていた。へたな弁解をしても仕方がないからだ。



だが先生は、それ以上は何もいおうとせず授業を再開した。どうやら、教室がさわがしいので、みんなをしずめるためにだれかひとりをとなりつける、その標的<sup>ひょうてき</sup>に彼が選ばれたらしいかった。

外のようなすは気になるものの、また名前を呼ばれてはかなわないので、しばらく授業に注意を集中しようと努<sup>つと</sup>めた。

三分か四分、経っただろうか。

気がつくと、教室のがやがやとは別に、外からの声が聞こえているのだった。

「なんとかいえよ。え？」

だれかがわめいている。

「勝手によその学校へ入ってきて、なんの挨拶もしないのかよ？」

そんな声も耳に入った。

「構わないでくれといっているだろう？」

いい返す声があった。「われわれは疲れ果てたから、ここで心と体を休めようとして来たんだ。助けてくれるつもりがないんなら、それでいい。だが、われわれの邪魔はしないでもらいたい」

「何を。生意気なこと、ほざきやがって！」

嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>めいたとなり声。